

聴き合う授業の中で学びを深める子どもの育成

～教科指導と学級活動をリンクさせた聴き合う授業の在り方～

大関 一教（教育実践コース）

1 課題意識

劇的に変化している社会の中で、子どもたちが、他者とかかわり合い、協働しながらよりよい生活を送っていくための資質・能力を身に付けることが学校教育では必要である。

筆者は、年度初めの学級における支持的風土ができあがっていない状態では「学びが深まらない」「学級経営がよくなければ、授業が成立しづらい」と感じるがあった。また、多くの授業を参観する中で、「授業で子どもの学びが広がったり深まったりしている学級は、子どもたちの関係性もよく、安心した雰囲気が醸成されている」とも感じていた。つまり、「授業の中で子どもたちに資質・能力を身に付けると同時に、よりよい人間関係を構築していく」ということが重要なのである。

石井（2019）は、『学び合う学び』の授業では『聴き合う』ということと互いの考えを『つなぐ』ということ。聴いてつなぐという言葉のやりとりこそ対話的である」といっている。そして、「対話は、双方向性のある言葉の往来で成立し、学びが深まる対話は、必ず聴き合いになる。聴き合いは対話の基本である」と述べている。

日々の授業の中で「聴き合う」ことを目指した授業づくりと、よりよい人間関係を築く学級経営を行うことによって、「主体的な学び」「対話的な学び」を生み出し、「深い学び」を実現していくことが可能になる。つまり、授業づくりと学級づくりをリンクさせることにより、子どもは互いの考えを聴き合う中で他者の考えを受け入れ、つながりのある対話を生み出しながら、考えを深めていくことができるのである。

2 「聴き合う授業」とその要件

(1) 「聴く」こと・「聴き合う」ことの整理

1年次前期は先行研究及び大学院の学びから「聴く」こと・「聴き合う」ことを整理し、次の2つの視点を設定した。1つ目は、授業における子どもの聴き合う姿と授業者の在り方である。2つ目は、聴き合う関係性を育むための学級づくりである。1つ目の視点については、第6学年国語科「学級討論会をしよう」の授業参観を通して、相

手の意見を聴き、真摯に受け止め、返答する姿や質問を返す子どもの姿を見取ることができた。また、授業者の姿からは、子どもへの問い返しや揺さぶりの発問が子どもの考えを深めることが分かった。2つ目の視点である聴き合う関係性を育むための学級づくりについては、3(1)教科指導と学級活動をリンクさせた聴き合う授業において説明する。

(2) 聴き合う授業と子どもの聴き合う姿とそれをつくり出す要件

① 聴き合う授業の定義

前述のように石井（2019）は、「聴き合う」ことは互いの考えを「つなぐ」ことであると述べていた。「つなぐ」ということは、子どもと子どものかかわり合いが生じることである。そこで、「聴き合う授業」を次のように定義した。

「互いの考えを聴くこと」と「互いにかかわり合うこと」を通して、安心して授業に臨んだりつながりのある対話を生み出したりしながら、考えを深め、納得解を導き出す授業

② 子どもの聴き合う姿とそれをつくり出す要件

聴き合う授業を実践する上で、五泉市教育委員会が作成した「聴き合う関係性をつくり頭と心をアクティブにする授業デザイン」の授業モデルを基に、聴き合い場面の設定と教師の支援を明確にして、道徳科と体育科の授業実践を行った。そして、子どもの聴き合う姿（表1）とそれをつくり出す要件（表2）を明らかにした。

表1 子どもの聴き合う姿

- ・問われたことに対して、ズレを感じ、自分の考えを巡らせている姿
- ・一人の子どもの考えに対して、周りの子どもが反応している姿
- ・他者の考えと比較したり、関連付けたりしながら応答している姿
- ・沈黙の中で、自身の考えを再構築したり深化させたりする姿
- ・他者の考えに賛同する姿
- ・自身の考えをしっかりともち、明確に述べている姿
- ・学習課題に迫るために、互いに自分の考えを言い合い、それを聴く中で解決策を練り上げている姿
- ・疑問に思ったことを言葉（外化）にし、それについて全員で考えたり決めたりしていく姿
- ・グループの聴き合いの中で考えたことを、学習活動や振り返りに生かす姿

表2 子どもの聴き合う姿をつくり出す要件

<p><学習環境面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・聴き合いの場（ペア、グループ、全体共有）の設定 ・グループの人数や時間配分 ・考えをもつためのワークシートや学習カードの活用 ・どんなことを話しても自分の言葉を受け止めてくれる学級の雰囲気づくり <p>-----</p> <p><教師の支援面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の働きかけ（指示、発問、傾きやあいづち等、状況確認、励まし）を、グループの聴き合いや全体共有の場で実施すること ・魅力ある学習課題の設定 ・単純なやりとりで留まらず、「複雑応答」や「自発的発言」がうながされるような手立てを講じること（教師のコーディネート） ・「立場を明確にすること」や「自分の考えをもつこと」が必要とされ、それらをグループの聴き合いや全体場面で共有すること ・「聴く」ことの価値を子どもに実感させること

(3) 成果と課題

① 成果

表1に示した子どもの聴き合う姿にせまり、学びを深める姿を目ざすためには、表2に示す「学習環境」と「教師の支援」が必要不可欠である。そして、ある特定の授業だけでそれらの要件に対する手立てを講じるのではなく、どの授業においても実施していく必要がある。

② 課題

1年次の研究で得られた知見を基に、聴き合う授業における子どもの学びが深まる具体的な手立ての構想と日々の授業と学級経営をつなぐ実践の在り方を追究していく。

3 教科指導と学級活動のリンク

(1) 教科指導と学級活動をリンクさせた聴き合う授業

2年次は1年次の成果と課題を基に、教科指導と学級活動のリンク構想図(図1)を作成し、年間を通して聴き合う授業の実践を行った。

(2) 学級活動(学級力向上プロジェクト)の実践

① 学級力向上プロジェクト

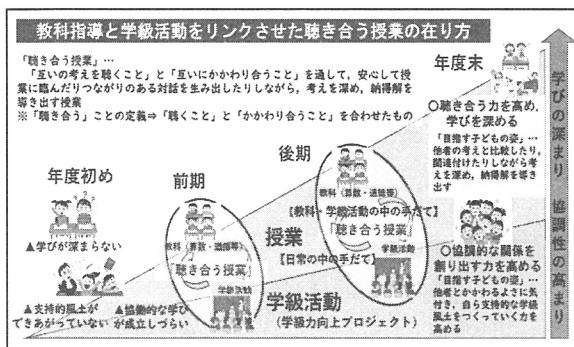


図1 教科指導と学級活動のリンク構想図

学級力は、目標を達成しようとする「やりぬく力」と、対話と協力で「つながる心」から成り立っているために、教室での学習場面においても、

そうした2つの力がある学級において、教え合いや学び合いが成立するとともに、落ち着いた安心できる、規律ある環境で集中した学習が成立することから、学力向上にも効果があると考えられる(田中, 2013)。

年間を通して、学級力向上プロジェクトに取り組むことで、子どもの「協調的な関係を創り出す力」を高め、子ども自ら支持的な学級風土をつくり出そうとする姿が増加してくると思え、実践を行った。

② 学級活動を通して学級力を高める子ども

子どもたちは、学級力レーダーチャートの結果を基に、どのようにしたら学級力を高め、よりよい学級になるかをグループや全体で話し合い、分析を行ってきた。

表3の学級力アンケートの得点結果から、子どもたちは「友達の話に賛成・反対・付け足しと、つなげるように発言している」項目が高まったのは、授業の中で「なるほどものさし」を活用していることを自覚しているからだと分析していた。しかし、「学習」の項目が低いことを課題として挙げていた。この結果を受け、「学習」を向上させるためにも、「聴く姿勢」「つながり」「支え合い」に力を入れることが大切であると気付いたのである。そして、担任も子どももさらに「つながり」を意識した授業を行った。

話をつなげる力の「つながり」の項目(第5回)において、これまでの値の中で91ポイントと一番高まっていた。子どもたち自身も授業の中で、話をつなげる力を意識しながら取り組んできた結果と考えられる。

表3 学級力アンケートの得点結果

領域	項目	第3回 (9月下旬)	第4回 (10月中旬)	第5回 (12月上旬)
話をつなげる力	聴く姿勢	65	70	75
	つながり	80	77	91

また、学級力向上プロジェクトと並行し、子どもが、友達の考えにつながりをもったり、称賛したりできるように、学級活動の中で子どもと共に反応言葉を決めた(図2)。教師は、「聴くこと(聴く姿勢、つながり)」の価値付けとして、反応言葉を使っている子どもの発言を称賛し、価値付ける

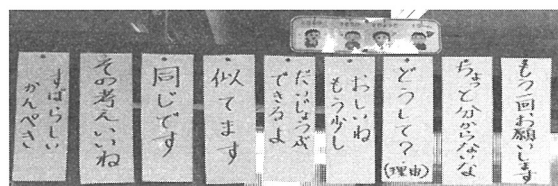


図2 児童と決めた反応言葉

ことを継続して行った。その後、子どもは授業の中で、これらの言葉を他者が話した後に積極的に使うようになっていった。

以下は、学級活動に対する子どもの考えである。

- ・道徳とつながりがある。道徳で生かせる。国語や総合学習、道徳とつながり、話し合いに活用できる。
- ・一人一人が自分の考えを言ったり、人の考えを聴いたりするから、いろいろな学習とつながる。
- ・友達の考えにつながりをもって発言することができた。
- ・自分からは意見は出せなかったけど、みんなの意見を聴いて考えることができてよかった。
- ・グループの話し合いで賛成したり反対したりすると、いろいろな意見が出て話し合いが深まった。

子どもは、上記のように学級活動が他の教科とつながりを持ち、一人一人が自分の考えを言ったり、他者の考えを聴いたりすることができるよさを感じている(下線部)。また、子どもは学級活動の中で様々な意見に触れ、自身の考えと他者の考えを比較したり、関連付けたりしながら話し合いを行っていることが分かる。

このような年間を通した「学級力向上プロジェクト」の実践によって、次のような「聴き合う授業」が可能となった。

(3) 道徳科授業実践(2020年7月に実施)

① 授業の概要

主題名: 友達のことを考えて(B-友情, 信頼)

教材名: 「絵はがきと切手」(国語 4年 教科書 4年 4巻 104頁)

本時の課題は、「友人の絵はがきが料金が不足だったことを知らせるかどうか迷い、知らせることを決心する主人公の気持ちを考えることを通して、友達と互いに信頼し、助け合い、忠告し合っって友情を深めていこうとする心情を育てる」である。

② 聴き合うことによって学びを深めるための手立て

子どもの多様な考えを引き出し、互いの考えを双方向にやりとりできるように以下の2つの手立てを講じた。

- ア 終末を提示せず、主人公や友達の気持ちを考えさせる
- イ 対話ツール「なるほどものさし」を使い、他者と自分の考えを比較させ、考えさせる

③ 他者の考えに反応し、考えを深める子ども

以下は、授業の展開場面における全体共有での聴き合い場面の発話記録である。

- C74: 悩み中・・・伝えても、なんか仲が悪そうになるし、お礼だけ言ってまささんが傷付いたら、何で言ってくれなかったのってなりそうだから。
- C75: そうそう、それですよ。なるほどです。
- T58: 続けて、Hさん、どうぞ。なるほどって言ったよね。
- C76: なるほどです。
- T59: どうして?理由は?
- C77: えっと、ひろ子さん・・・続きでもいいですか?
- T60: いいですよ、続きだったら、一番いいじゃないですか。
- C78: ひろ子さんがかわいそう。

T61: ひろ子さんがかわいそう。

C79: なんか、2人が仲悪くなりそう。その・・・

C74の発言をきっかけに、C75「そうそう、それですよ。なるほどです。」C76「なるほどです。」と、C74の考えになるほどものさしを活用し反応を示し、C77・78・79と自分の考えを続けて述べながら、考えを構築している姿である。

また、以下は発問「教えることを決めたひろ子さんは、まささんに対してどんな思いなのか。」に対するR児のワークシートの記述である。

正子さんに「郵便料金不足のお知らせ」のこただけを返事の手紙に書くと、正子さんが悲しんでしまうし、お礼だけ言うと自分が57円払ったってことを正子さんが知らないで自分と家の人に迷惑で、自分がモヤモヤしてしまうから、返事の手紙にはお礼を書いて最後に少しだけ57円不足したことを伝えよう。

R児は立場を決めた際、お礼だけと言うか、伝えないかを悩んでいた子どもである。その子どもは、両方の立場の考えを聴きながら、最終的には、「お礼を書いて最後に少しだけ57円不足したことを伝えよう」(下線部)と考えたのである。どちらの気持ちも大切に思い、どうすることがよいかを友達の考えを聴くことを通して、自分の納得解を導き出している姿ととらえることができる。

(4) 算数科授業実践(2020年12月に実施)

① 授業の概要

単元: 算数科「面積」(第4学年)

本時の課題は、「面積の求め方をネーミングすることを通して、他者の考えと自己の考えを比較し、複合図形の面積を工夫して求めるやり方を説明したり、複合図形の面積を求めたりすることができる」である。

② 聴き合うことによって学びを深めるための手立て

平山(2009)は、「考えの妥当性や有効性が明らかになったところで、それぞれの考え方にぴったりのネーミングを考えさせる」と述べている。

筆者は、上記の平山の手立てを基に子どもの「聴きたい」という状態をつくり出し、自己と他者の考えを比較したり関連付けたりする中で考えを深めさせたいと考えた。そこで、平山の手立ての順序を入れ替え、以下の4つの聴き合うことによって学びを深めるための手立てを講じた。

- ア 自力解決で求め方のネーミングを行う
- イ 「なるほどものさし」で納得度を評価する
- ウ ネーミングの理由を聴き合う
- エ ネーミングを整理する

③ 反応言葉を使い、考えを深める子ども

全体共有でネーミングの理由(面積の求め方)を説明させ、納得度を再評価させた。以下は、H児が説明する前の子どもの反応である。

T 57: じゃ、Hさんの「場所変え方式」は、どうですか。
 C107: う〜ん。(多くの子どもが分からない反応を示す)
 C108: なにそれ。ちょっと分からないな。
 C109: 全然分からないな。

T57で「場所変え方式」の納得度を問うと、C107「う〜ん。」と多くの子どもが分からない反応を示した。また、C108とC109も「分からない。」と発言をしている(上記下線部)。

その後、H児は、図3のような「場所変え方式」の求め方を全体に説明した。以下が、そのときの発話記録である。

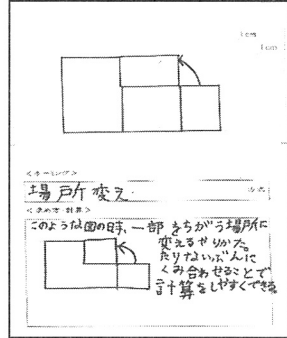


図3 H児のワークシート

C114: まず、ここで区切って、こっちにこの割ったやつを移します。
 C115: おお。
 C116: そうすると、大きな四角形ができるので、これで、1, 2, 3, 4, 5, 6 (横)。1, 2, 3, 4, 5 (縦)なので、五六30で30cm²になります。
 C117: おお。(多くの子どもから拍手が沸き上がる)
 T 62: おお。五六30。式が出てきたね。5×6で30。ということは、30?
 C118: 30cm²。
 T 63: これ、ここから、場所を?
 C119: 移した。
 T 64: 移した。
 C120: あ、やり方。移動している。
 C121: 「移動合わせ方式」でやっている。
 T 65: 場所を変えた、移動している。
 C122: その考え方すごいね。

H児が、C114及びC116で説明をすると、C115、C117で「おお。」と納得する反応を示した(上記下線部)。そして、多くの子どもから拍手が沸き上がったのである。図形を「移動する」ことに着目して求め方を考えた子どもは、学級の中で2名しかいなかったことも、多くの子どもが称賛した理由の1つであると考えられる。また、C120と121は、既習事項とH児の「場所変え方式」が同じ考え方であると発言している(上記下線部)。このように前時までの学びを本時の中で結び付けて話していることから、考えを関連付けながら学び、納得解を導き出している姿であると推察する。

授業の振り返りで、H児の「場所変え方式」について、以下の記述が見られた。

ぼくは、Hさんの「場所変え方式」がすごいと思いました。場所を変えたら、長方形になり、計算をしたら答えが出るなんてすごいと思いました。

「場所を変えることで長方形になる」という、自分では気付かなかった考えに触れ、「すごい」と感じていた。これらの記述から、考えを広げ、他者の考えのよさに気付くことができたことと推察する。

4 総括

(1) 成果

1つ目の成果は、「教科と学級活動をリンクさせ、どの授業においても聴き合う授業を行うことにより、子ども同士、子どもと教師の間に聴き合う関係性が生まれ、安心して発言したり聴いたりできる『協調的な関係を創り出す力』を高め、支持的な学級風土をつくっていくことができる」ことである。

2つ目は、「学習環境を工夫したり、授業内における教師の働きかけや手立てを明確にしたりする聴き合う授業を、教科だけでなく、学級活動においても行うことにより、子どもの反応が増加し、他者の考えを聴き合う中で自己の考えを広げたり深めたりしながら、納得解を導き出し、学びを深める」ことである。

以下に教科指導と学級活動をリンクさせるための手立てをまとめる(表4)。

表4 教科指導と学級活動をリンクさせるための手立て

【教科・学級活動の中の手立て】
①複数の意見や考えに分かれる発問や問題の提示 <ul style="list-style-type: none"> ・立場や考えが分かれるようにする。 ・ネーミングさせる。
②考えの視覚化 <ul style="list-style-type: none"> ・自他の考えが分かるように、ネームプレートを活用する。 ・考えを図や式で表す。
③対話ツールを活用したかかわり合い <ul style="list-style-type: none"> ・なるほどものさしを使いながら、聴き合いを行う。
【日常の中の手立て】
①反応言葉の掲示 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもから出た反応の言葉を短冊にし、増やしていく。
②学級力向上プロジェクトにおける学級活動の活性化 <ul style="list-style-type: none"> ・係活動を推進する。
③「聴くこと(聴く姿勢、つながり)」の価値付け <ul style="list-style-type: none"> ・教師が反応の言葉を使っている子どもの発言を価値付ける。

(2) 課題と今後の展望

教科・学級活動の中の手立てと日常の中の手立てを工夫し、教科指導と学級活動をリンクさせた聴き合う授業を継続して行うことにより、教科の中での学びと学級力が相乗的に向上していくことが考えられる。

しかし、「聴くこと」「聴き合う」だけで学びが深まるわけではなく、相手に「伝える」という双方向のやりとりがあつてこそ、聴き合いが生まれ、自身の学びにつながるのである。

今後は、子どもたちの「伝える力」を教科指導や学級活動の中で相乗的に高めることができる実践研究を行い、子どもたちが学ぶことに意欲をもち、互いの考えを聴き合いながら、課題を解決していく力を身に付けることのできる授業の実現を目指す。